

なんばたのりよし それからの難波田憲欽

市民学芸員 山本 長春

難波田憲欽（1857年－1936年）は難波田城主の子孫で軍人でした。明治期、屯田兵の中隊長の時に北海道旭川市などで河川改修に尽力しました。その功績から現地に「難波田（なんばた）川・橋」があるのには驚きました。退役後に家族と上京し、裏隣りの高村光太郎と交流があったことまでは、「難波田城だより」74号（2017年冬号）で紹介したところです。

それから憲欽はどう生きたのでしょうか。

上京後、印刷業に手を出すも失敗し、東京の私立目白中学校に就職します。

目白中学校は、中国人留学生を受け入れるために開設された東京同文書院に併設する形で明治42年（1909年）に開設されました。初代校長は、熊本藩主の子孫である細川護成もろしげです。

目白中学校の後継である「中央大学附属中学校・高等学校」の校史は憲欽とその子龍起たつおきについて、2頁にわたり紹介しています。憲欽は目白中学校で生徒指導と書道を担当していました。生徒の習字に丹念に朱を入れ、古武士然としていました。

同僚には、国語学者の金田一京助しち、画家の清水七



難波田憲欽氏

太郎たろうなどがいました。大正13年（1924年）の教職員住所録には、金田一らとともに憲欽が「生徒監 事務主任 陸軍歩兵少佐」の肩書で掲載されています。

ちなみに、憲欽の次男で抽象画の大家である龍起も目白中学校に入り、前出の清水七太郎から初めて絵画を学び、大きな影響を受けています

また、調べていくうちに、同校の元歴史教諭・保坂治朗氏の講演録（2008年）を見つけました。保坂氏は憲欽にふれ「調べると面白い」と語り、中国人だけでなくベトナム人の留学生に対して鉄砲の撃ち方などを教えていた、つまり軍事訓練をしていたと紹介しています。さらに、このときのベトナム人留学生たちが帰国後、反仏・独立運動に加わろうとしていたといえます。歴史の大きなうねりに憲欽が関わっていたとはびっくりです。

次に当時の憲欽の写真を探しました。そして同校の司書教諭・平野誠氏に貴重な資料を送っていただきました。大正10年の『卒業記念写真帖』には教職員の集合写真があります。さらに憲欽の肖像写真を孫の武男氏（東京在住）からいただき、集合写真と照合することができました。

退職後、憲欽は趣味の菊づくりに精を出しました。その菊を隣の高村家にも贈呈したと、龍起は語っています。波乱に満ちた79歳の人生も晩年は穏やかだったようです。

※本記事は他にブログ「落合道人」を参考にしました。



目白中学校（大正10年『卒業記念写真帖』から）



前列右から4人目が憲欽。後列右から3人目が金田一京助（同上）

市民学芸員のページ *このページは市民学芸員が原稿を執筆、編集しました。

難波田城 ちょっと拝見 みどころ紹介

石造物シリーズ⑤ 「地固めの石」

旧金子家住宅と資料館の間にある植え込みに大きな石が置いてあります。表面に「前清」と刻字があります。意味は不明ですが、かつて新河岸川の蛇木河岸の船問屋として栄えた、前田清吉の略称とも理解できます。関わりがあるかもしれません。

この石は「地固めの石」です。家などを建てる前に上から地面に落として基礎固めをする作業（地固めや地搗きなどという）で使用されていました。昔の土木道具の一種です。

また、地搗きをする際のかげ声や、その作業、およびそれに従事する人をヨイトマケともいいます。美輪明宏の「ヨイトマケの唄」のヨイトマケです。

この地固め石は、市民の方から寄贈していただいたものです。昭和三十年頃、寄贈者が諏訪にあった土蔵を壊す仕事を請け負った時に、落ち葉の中に埋もれていた石を見つけ、もらってきたそうです。寄贈者とはび職ですが、実際の仕事で使ったことはないそうです。

昔の道具、先人たちの知恵の結晶ですね。 (中島哲雄)



地固めの石



地固めの様子(絵：渋谷喜太郎氏)

おもしろ・なつかし体験⑥3

稲の脱穀体験

このコーナーは、難波田城公園での体験学習やイベントの紹介・報告・参加者の感想などを取り上げます。

難波田城公園では、園内の田んぼを利用して田んぼ体験や、麦作り体験をしています。今回は、田んぼ体験の脱穀作業のレポートです。

収穫した稲から白米を得るには、稲穂の部分から籾(実)をとる「脱穀」、さらに籾を覆っている殻を取り除く「籾すり」、そこから糠などを取り除く「精米」をしなければなりません。現在、脱穀は、コンバインなどの機械で行われています。そのため稲から籾がとれる瞬間を見る機会はほとんどありません。

今回の脱穀体験は3つの方法で籾をとりました。まず、指。二本の指で穂の部分をしごき、籾を外します。次に使うのは、こき箸。指の代わりに箸を使います。箸を手全体に握ることができるので、指より効率的に籾を外すことができます。そして3つ目

が千歯こきを使った脱穀です。

千歯こきができるまでは、こき箸での脱穀は夫と死別した女性の仕事の一つだったといえます。千歯こきの普及でその仕事が無くなってしまったため千歯こきは「後家倒し」と呼ばれたといえます。

稲穂を歯にかけ、子ども達が「よいしょ」「よいしょ」と思い切り引くと、あら不思議、籾がバラバラと落ちてきます。大人の参加者からも「気持ちいい」「あーすっきりした」「楽しい」の声が…。

さて、稲穂から籾をとった残りの芯を何というか知っていますか? 「しべ」といいます。「わらしべ長者」のお話のわらしべです。いいことがあるかどうか、一度試してみませんか? (村田幸二)



人の創ったもの★人の使ったもの

ちゃぶ台は“平等”の象徴

園内の古民家に展示中のちゃぶ台を紹介します。

ちゃぶ台の使われ方

旧金子家住宅にある 2 台のちゃぶ台のうち、大きい方のちゃぶ台(写真)は平成 16 年(2004)に市内かつせ勝瀬の農家の女性(昭和 9 年-1934-頃生まれ)から寄贈されました。このちゃぶ台(直径 87.5cm、高さ 27.5cm)を囲み、両親と娘 3 人の計 5 人が食事をしていたそうです。ちゃぶ台を使い始めたときの記憶はなく、昭和 50 年(1975)頃に家を建替えた後は 6 人掛けのダイニングテーブルとイスを使うようになったとのことです。

一方、なんぼた南畑の農家で育った男性(昭和 9 年生まれ)によると、子どもの頃は家にちゃぶ台はなく、昭和 38 年(1963)まで食事にははこせん箱膳を使っていました*。土間にテーブルを置いて使い始めたのは 30 年(1955)頃でした。しかし、昭和 20 年代の終戦直後、東京方面から食糧の買い出しに来た人が「いいものを持ってきた」と、食べ物と交換するために小さなちゃぶ台を置いていきました。ふだんは脚を折りたたんで(写真参照)、部屋の隅などに立て掛けておき、勉強机として何度か使いました。手軽に移動できるので、日曜日などに日なたに出し、太陽に背を向けて暖まりながら勉強したそうです。

*…難波田城だより第 30 号、31 号を参照

ちゃぶ台は西洋文化と日本文化の融合

さて、ちゃぶ台はテレビドラマやアニメなどで昭和時代前期のだんらん一家団欒の食事風景に描かれることが多いので、日本古来の物と思う人もいるかもしれませんが、そうではありません。日本の日常生活においては、古代から江戸時代まで西洋のテーブルのように一つの食卓を複数人で囲んで食事をする習慣がなく、一人ずつのめいめいぜん銘々膳や箱膳を使っていました。これは、上は天皇・将軍、下は町人・農民まで例外はありませんでした。江戸時代までの日本はきわめて身分制度の厳しい社会だったからです。

同じテーブルで食事をするということは人間関係

このコーナーでは、地元に関する資料を紹介しません。今では使われなくなったものからわたしたちの身近な歴史をひもといてみたいと思います。



旧金子家住宅に展示中のちゃぶ台



裏側

脚をたたんだ状態

が平等だということを意味します。一人ずつの膳は、身分に応じて膳そのものの素材や形、食器の質、料理の豪華さが違いました。同じ身分でも、家族でも、年齢、立場、性別で序列がありました。

明治時代に、西洋文化の受容とともに徐々にテーブルが普及しました。上流階級では西洋館の建築に伴い、テーブルの導入が進みました。街中でも西洋料理店やビヤホールなどができ、テーブルが使われました。次第に一般の人々の意識も変わり、都市部の労働者層を中心にちゃぶ台が使われ始めます。彼らは住居が狭く、封建的な考え方にあまり束縛されなかったため、実用的な食卓が採用されたのです。その後、封建的な考えが残る農村部まで普及したのは大正デモクラシーを経た昭和初期でした。

西洋のテーブルを、日本の住居事情(狭い)や居住習慣(部屋では履き物を脱ぎ、床に座る)に合わせ、折りたたみ式の座卓としたのは、日本人の工夫でした。

(駒木 敦子)

【主な参考文献】小泉和子『昭和のくらし博物館』(河出書房新社、2000 年)

＊ ＊冬のイベント予定＊ ＊

●資料館からのお知らせ

資料館は空調設備改修のため現在、臨時休館しています。なお同期間中も公園、古民家は開いています。皆様にご不便をおかけいたしますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

期間／令和元年 10 月 7 日～令和 2 年 2 月 28 日

●春季企画展

「お風呂の富士見誌-うちで湯ったり・でかけていい湯-」

市内のいろいろなお風呂や、古文書に残された湯治などを紹介します。

会期／3 月 14 日(土)～6 月 14 日(日)

会場／特別展示室

●つきたてのお餅の販売

ちよつ蔵市で、つきたての餅の販売をします。
 とき／12 月 22 日(日) 午前 11 時～売切れまで
 価格／1 パック 200 円 会場／旧金子家住宅
 主催／難波田城公園活用推進協議会

●ふるさと体験「正月飾りづくり」

とき／12 月 27 日(金) 午後 1 時～3 時

会場／旧金子家住宅

対象／市内在住在勤の方

定員／15 人(申込み順)

参加費／1,200 円(材料代)

持ち物／はさみ 指導／^{きつかわまつお}吉川節男氏

申込み／11 月 30 日(土)午前 9 時から電話で

●正月飾り材料の予約販売

受付／11 月 30 日(土)～12 月 15 日(日)

午前 9 時～午後 5 時に電話で

※締切り後のキャンセルはご遠慮ください

引渡し／12 月 27 日(金) 午後 1 時～3 時

旧金子家住宅

費用／1 組 1,000 円(わら付きは 1,100 円)

主催／難波田城公園活用推進協議会

●ふるさと体験「古民家で手作り味噌」

手作業の味噌づくりを体験し、自作の味噌(2kg 分)を持ち帰ります。

とき／2 月 22 日(土) 午後 1 時～3 時

会場／旧金子家住宅 参加費／1,500 円(材料代)

定員／市内在住在勤の方をふくむ 15 組(申込み順)

持ち物／エプロン、三角巾、容量 10ℓの容器など

申込み／2 月 1 日(土)午前 9 時から電話で

●扇だこづくり講習会

かつて富士見市の特産品として知られた郷土民芸「扇だこ」をつくります(全 2 回)。

とき／3 月 7 日(土)・8 日(日)

午前 10 時 30 分～午後 3 時

会場／講座室 定員／8 人(中学生以上、申込み順)

参加費／1,000 円(材料代)

指導／扇だこ保存会 申込み／随時。電話か直接



ちよつ蔵市

(難波田城公園活用推進協議会主催)

12月22日(日)おもち

1月26日(日)マユ玉だんご

2月 お休み

3月22日(日)草もち

田舎まんじゅう販売 第 1、3 日曜日 10:30～ お月見亭(予約制手打ちうどんランチ) 12 月 10 日(火)、2 月 11 日(火) 11:30～13:30 *1 月はお休み

※他にも様々なイベントがあります。各イベントの詳細は、広報ふじみやポスター、チラシ、公式サイトなどでお確かめください。

年末年始の休館のお知らせ

資料館と古民家は 12 月 29 日(日)から 1 月 3 日(金)まで休館です。公園は無休で、午前 9 時から午後 5 時まで開園しています。



富士見市立難波田城資料館

Tel. 049-253-4664 Fax. 049-253-4665

〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑 568-1

https://www.city.fujimi.saitama.jp/madoguchi_shisetsu/02shisetsu/shiryokan/nanbatajo/index.html

◆休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(土・日・祝日を除く)、年末年始 開館時間／午前 9 時～午後 5 時

◇公園休園日／なし 開園時間／午前 9 時～午後 6 時(4 月～9 月) 午前 9 時～午後 5 時(10 月～3 月)



資料館公式サイト